



Myメイド

わかつきひかる

illustration ©みやま零

美少女文庫  
FRANCE  SHOIN

それぞれの  
プロローグ

カノジヨは貧乏お嬢様!?

私立空色高校の校門の前の通学路は、三々五々下校していく生徒たちで埋まっています、まるで紺色の波が移動していくようだ。

佐々木大地は人混みのなかで、うーんと伸びをしながら空をあおいだ。

風は冷たいが、すがすがしいほど青い空がひろがっている。桜の花は終わってしまったが、春はいちばんいい季節だ。新しいことがはじまりそうな予感がする。

「きやつ」

肩が当たり、小さな悲鳴が聞こえた。

反射的にあやまってしまう。

「ごめん」

「よくってよ。私も悪いから。こっちこそごめんなさいね。……あれっ。佐々木くん

だ  
 勅使河原<sup>しが</sup>亜由<sup>わらあゆ</sup>。二年D組の同級生だ。春とはいえ、まだ肌寒い季節なのに、額に汗をにじませて、上気した頬をしている。ほんわかと甘い匂いが漂ってきた。コロンとかではない。彼女自身の体臭だ。

——いい匂いだなあ……。

「勅使河原さん、僕を覚えてるんだ？」

「当然でしょ？ 同じクラスですもん」

新学期がはじまって二週間だから、そろそろクラスメイトの顔を覚える頃ではあるのだが、亜由に覚えてもらえたことが素直にうれしい。

「僕って影薄いだろ。勅使河原さんは目立つけど」

「そんなことないわ」

亜由は花がこぼれるように笑った。周囲がぱつと輝いて見えるほど、華やかな笑顔だ。

春の風が、亜由のツイントールに結った黒髪をさらさら撫でる。長いまつげが整った横顔に影を落とし、驕慢<sup>きょうまん</sup>そうにも見える顔立ちをかわい系の印象に変えていた。

ブレザーにプリーツスカートの同じ制服を着た女子生徒が何人いても、いや、同じ制服だからこそ、彼女の美しさは際立っていた。亜由のまわりにだけ、スポットライ

トが当たっているようだ。

——おい、勅使河原さんだぜ。相変わらず上品だなあ。なんかオーラを感じるよ。

——亜由先輩っていいお家のお嬢様なんでしょ？

——うん。町はずれに洋館があるじゃん。あれ、勅使河原さんのお屋敷だって。ご先祖は華族だとか大名だとかって聞いたよ。

——勅使河原さんって、特待生なんだって。成績もよくてスポーツもできるって。

学園のマドンナだよなあ。

——ちよっと気取ってる感じがするけどね。

——まあ、そりゃ、あれだけ綺麗だったらしかなないよ。

ウワサする声が聞こえてきた。

大地は意味もなく、得意な気分になってしまふ。

——そうだよ。僕は学園のアイドルと同じクラスなんだぜー。タメ口で会話できるんだぜー。

「じゃね。急ぐから。またね」

学園のアイドルのお嬢様は、かわいく会釈すると、パタパタと走っていった。

佐々木は、走り去っていく亜由の背中をあこがれの視線で見た。ミニ丈のプリーツスカートからのぞく太腿と、膝小僧の内側のくぼみがあざやかに白い。ツインテール

が勢いよく跳ねて、ブレザーの肩に当たっている。

「へへへっ」

大地はにまにまと笑いながら、小さな幸運を噛みしめた。

☆

勅使河原亜由は、ファミリールストランの裏側の従業員入り口で、周囲をこそこそと見渡した。

——誰もいないわ。今がチャンスよっ。

そうつとドアを開けて身体を滑りこませる。

「お早うございまっすっ」

「勅使河原さん。今日は遅いね」

「すみません。図書館で本をかえしたら、遅くなっちゃって」

運悪く鉢合はちあわせしてしまった店長にこやかにあいさつしながら、タイムカードを押し。

「タイムカードは仕事の準備ができてから、って言ってるだろ」

「はいっ。すみませんっ」

亜由は、かわいく笑い、上目遣いで店長を見てごまかした。

五分後には、もう亜由は、黒のミニワンピースと白いエプロンの、ウエイトレスのコスチュームでお盆を持って店内を歩きまわっている。

「いらっしやいませ」

「お水はいかがですか？」

「こちら本日のおすすめの肉料理でございます」

笑顔を振りまき、接客をする。もう半年近くつづけているので、てきぱきしたものだ。

平日の放課後、三時間から四時間程度バイトをするのが、彼女の毎日の習慣になっていた。

セーラー服の女子高生が、亜由を見つけて声をかけた。この制服は隣町の公立だ。

「うっそーっ。勅使河原さんだよね？」

「あーっ。勅使河原さんだっ！ バイトしてるの？」

——あちゃーっ。

中学のときのクラスメイトが三人、テーブルを囲んでいる。

時間の融通が利くうえに、食事が出るので選んだバイトだが、知り合いに逢うたびに顔がひきつってしまふ。

「ええ。社会見学なの」

「そうなんだあ。立ち仕事だし、バイト代安いからたいへんでしょ？」

「そうかもね。でも、社会体験よ。お金には換えられないわ」

「お嬢様なのにえらいのね」

——なにがお嬢様よっ。お父様のバカッ、いっぱい借金こさえやがってーっ。ご先祖様もご先祖様だわっ。隠し財産や家宝のひとつやふたつ、子孫のために遺しておいてよーっ。私の気持ちになつてみやがれーっ。

亜由は内心で吼えながらも、お嬢様っぽく笑い如才なく応答する。

「だって、ほら、この服、かわいいでしょ。着てみたかったの」

「ほんとね、メイド服みたいでステキよね。勅使河原さんに似合ってるよ」

「でしょでしょ？　メイドさんみたいでかわいいよねっ」

——ああ、もう、いっそメイドになつて、住みこみで働きたいぐらいよっ！　電気代つてどうしてこんなに高いのよっ。ったくっ!!

「内緒にしてね。ホントはバイト、ダメなのよ」

亜由はお盆を胸に抱きながら、いたずらっぽく唇に人差し指を立てて見せた。

「空色高校ってバイト禁止だっけ？」

「私って特待生でしょ。品行方正でなきゃいけないの」

「あー。そりゃ、内緒にしなきゃいけないよねー。うん。わかったよ。まかせてっ!!」  
「あ、そうかあ。勅使河原さん。成績、トップだったよね。特待生かあ。当然よねえ」  
——そうよっ！ 私は成績がいいわよっ!! 才色兼備の学園のマドンナよっ。ホン  
ト私ってエライわよっ。こんなに苦労してゐるっていうのにつ。

内心とは裏腹に、亜由は小首を傾かしげて謙遜けんそんした。

「やだっ。トップなんて大げさよ」

女の子たちと亜由は、共犯者のように笑い合った。

亜由の背中を、たあらりとイヤな汗が伝う。

——ぜいぜいっ。や、やったわ。これで完璧よっ。『お金持ちなのに、社会見学で  
バイトをしているお嬢様』のフリができたわっ。

勅使河原家は、貧乏だった。

見た目だけ立派な洋館の中身はポロポロで、固定資産税が払えず物納したあげく、  
とうに国の管理物件になっている。観光施設にする計画があったらしいのだが、いわ  
ゆる行政の怠慢で放置状態だ。

親戚はちりぢりで、母は亜由の幼い頃に鬼籍きせきに入った。どら息子を絵に描いて額に  
入れたような父親は、パチンコ競馬に明け暮れたあげく、綺麗なお姉さんと駆け落ち  
した。

だが、逆境は、亜由をたくましくした。

成績がよいのは、バイトと家事に明け暮れるなかで、要領よく勉強する方法を身につけたおかげだし、カンがいいからウエイトレスのバイトだってソツなくこなす。粗食は彼女を健康にし、病気知らずにした。

それに亜由には、金はなくとも、ご先祖から受け継いだ上品さと美しい容姿と頭脳がある。あえて欠点を探すなら、背が低いことと金がないことぐらいだろうか。

——きつと、神様のいたずらね。私が優秀で美しすぎるのが罪なのねっ！ バランスを取るために私を貧乏にしたんだわっ。

だが亜由にはもうひとつ欠点があった。本人が気づいていない欠点である。いや、特徴というべきだろうか。

テーブルの間を、料理を載せたお盆を片手に持って歩いていたとき、胸に違和感を覚えた。

「きゃっ」

悲鳴をあげ、足をとめる。

中年の男性が、にやにやと笑いながら手をひらひらさせた。すれ違いざまに、乳房をさわったらしかった。

「無礼者っ！」

亜由は、お盆に載せてあったスパゲッティの皿を、テニスの素振りのように、ぶうんと振りまわした。

客の顔に、スパゲッティアラビータがヒットした。できたての、熱いスパゲッティを顔にぶつけられたのだから、中年男にすればたまったものではない。雑巾ぞうきんを引き裂くような悲鳴をあげる。

「ぎゃーっ！ 熱いつ、あちちちっ」

「あらあー、お客様あーっ、だいじょうぶですか？ お客様が痴漢行為ちかんけいを働いたりなさるものですから、私、手が滑ってしまいました！」

亜由はお盆を胸に抱いたまま、ツンと顎あごをあげた。  
たちまち店内が騒然となる。

「な、な、なにを言うんだっ。君はっ。胸のホコリを払ってやっただけじゃないかっ。店長を呼べっ！」

「ホコリは自分で払えますっ！ 無礼なことをしたら許しませんよっ!!」

店長が飛んできた。頭からスパゲッティを垂らし、ワイシャツをアラビータでまだらに赤く染めた客に平身低頭する。

「すみませんっ。ウチの従業員がとんだことを……」

「私は悪くありませんっ！ このお客様、胸をさわったんですっ。痴漢は犯罪ですっ!!」

警察を呼びますよっ。監獄に入って反省なさいっ。最低よっ!!」

泣いて謝罪すればその場は収まったのだろうが、気が強い亜由は大声で怒鳴りまくるだけだ。

「無礼者とはなんだーっ。ウェイトレスのくせしやがってーっ。お前はお姫様かつ!」  
貧乏娘とはいえお姫様はほんとうなので、亜由はいよいよエラソウにふんぞりかえった。

「君はクビだーっ! スパゲッティ代とクリーニング代は君のバイト代から引くからなっ」

「わかりました。失礼しますっ! 店長、残りのバイト代は振り込んでくださいねっ」

「あ、ああ、もちろん……」

亜由はエプロンをはずしながら、振りかえりもせず歩き去っていった。

勅使河原亜由。私立空色高校二年D組。

成績優秀スポーツ万能、学費諸雑費すべて免除の特待生。才色兼備の学園のアイドル。大名華族の末裔<sup>まっえい</sup>で、生まれついてのお嬢様。

彼女は貧乏娘で、しかも気位がおそろしく高かった。

